

平成25年度 淀川水系流域委員会【地域委員会】 淀川水系河川整備計画に基づく事業等の進捗点検に関する 報告書に対する主な意見

淀川水系河川整備計画について、危機管理・治水・人と川とのつながり・河川環境・利水・利用・維持管理の各分野において、平成24年度の進捗状況について、点検を行った。主な意見は以下のとおり

◎進捗点検の方法や指標に関する主な意見

◆危機管理分野

- ・勉強会、マイ防災マップ作りなどの対象者は現在の消防団の機能を担い得る様々な人が考えられる。例えば女性や子供が担える機能など、消防団の役割を細分化し、地域で分担して消防団の機能を補完しあうという考え方もある。また、評価の際、誰に対してどういうプログラムを提供し、何をできるようになったのかを言及できるのではないか。
- ・まるごとまちごとハザードマップなど、結果とともに行政と地域住民がどのようなプロセス経てまとめたのか（まとめようとしているのか）併せて示すことが望ましい。

◆治水

- ・天ヶ瀬ダムの堆砂について、計画堆砂量などの情報も入れていただくとわかりやすい。
- ・自治体で進めていることも必要に応じて、参考的に記載すると全体の状況がわかりやすいこともある。
- ・淀川の各支川流域での貯留量など、数値的に示せる部分を明示していく事も必要。
- ・事業によっては年度ごとの進捗状況と併せて完成目標としている時期も示すことが必要。

◆人と川とのつながり

- ・川作りを市民との協働で行うという視点から、市民自らが提案し取り組んだ事例を把握していく必要がある。

◆河川環境

- ・河川レンジャーの活動として、外来種駆除を実施しているところもあるので、事例として示して欲しい。市民参加の実績（駆除状況）を参考資料にでも示してもらえると、活動の力にもなる。
- ・淀川の干潟・ヨシ原の現状が見えない。どのようなところにあって、どのようなところで再生をするなどの全体像があるのが前提。
- ・イタセンパラが生息できる環境を整備していくことを目指しているのであれば、イタセンパラが戻ったワンドは何が良かったのか、生息環境がどう回復したのかを評価し、次の取組に活かす方法を検討して欲しい。
- ・イタセンパラは淀川の生物多様性の象徴種であり、野生復帰に向けたプランの中で現状の評価と取組の目指すべき方向は示している。8年ぶりに成魚まで成長した環境というのは淀川本来の環境が一部の地域に再生できたと思っており、今後に明るい兆しが見えてきた。
- ・瀬田川洗堰操作については、琵琶湖環境への影響緩和の観点のみから評価されているが、産卵と洪水期前の水位低下が重なると、放流量の増量や下流高水位継続の長期化につながる。下流への影響も考えて柔軟な対応も必要ではないか。

◆利水

- ・例えば水制の整備数はわかりやすいが、その結果舟運や防災などにどう役に立っているのか、トータルの目標と併せて説明して頂くと良い。
- ・ダム湖を利用した各種取り組みについても参加人数等を示してもらいたい。
- ・（野洲川の7.2km 落差工）水遊びが多いことは遊べる場所があるということで、川の財産ともいえる。水難防止の観点からは積極的には行かないがそういう場所がある（あるいは出来た）という状況の把握も必要。

◆維持管理

- ・要補修箇所の中で対策をとるべしという所について、対策を実施しましたというような事をどこかに1行付け加えていただくなど工夫していただきたい。

◎事業実施に関する主な意見

◆危機管理分野

- ・災害時に早く要援護者を救出、避難させるためにも、要援護者への対応について、自治体との密な連携、事前検討をお願いしたい。
- ・作成したマイ防災マップを要援護者である障害者や一人暮らしのお年寄りなどにどのように伝達、周知していくかその方法や体制整備について検討すべき。

◆治水

- ・大きな出水後は、例えばダムの効果など治水について、地元の住民や首長などにきちんと説明すべきであり、また積極的に情報発信していくべきである。

◆人と川とのつながり

- ・アンケートでは、アンケートに答えた人自身が気づいている主観的なことしか把握できない。客観的にみて「協議会や河川レンジャー活動によって何か議論し始めた」など地域で何かが起こったときにそれをキャッチするような体制が必要ではないか。
- ・河川レンジャーの継続性の大切さと更新による多様性の必要性の両方が生かされるよう仕組みが望ましい。
- ・事業の実施に向けた早い段階から市民と一緒に川づくりワークショップ等ができれば、事業後の維持管理にも市民自らが積極的に取り組めるのではないか。
- ・河川レンジャーは地域に分かれて活動をしているが、上下流を含めた水系の全体像を議論する会合が必要ではないか。
- ・小径はハード整備だけでなく、ソフト面をいかに充実させるかという視点も必要。
- ・クリーン作戦は住民が川にふれあういい機会でもあるので、さらに参加者を増やすためにも回数を増やしたらいいのではないか。
- ・小径の整備においては、初期段階では河川レンジャーが地域の声や価値観を把握し、行政に伝える役割を担うが、河川レンジャーを介さなくてもうまく地域のニーズを行政が把握できる仕組みができることが望ましい。

◆河川環境

- ・次世代を担う子供の育成は非常に重要である。現代の子供は川の良さをあまり知らないなので、良さを気づかせることが大事。環境教育等の実施回数が H21 年度をピークに減ってきているので、もっと取り組みをお願いしたい。

- ・淀川における希少種や外来種の状況を把握し、目標や課題を整理し、全体像を示した上で、重点施策として「イタセンパラを野生復帰させる」、「どの外来種を駆除する」という戦略をたてないといけないのではないか。事業だけが先行しているようなイメージを受ける。
- ・ナカセコカワニナの調査や移植などの現場作業を子供や市民に体験してもらうことは大事。

◆利水

- ・湧水対策会議を設立することが難しいということだが、話し合いの場の設計として会議以外にも様々な形式があるのではないか。

◆利用

- ・大きな災害では上、中、下流はそれぞれに被害を受けていることもあり、こういった災害後のような機会にタイムリーに上下流の交流を進めていただきたい。
- ・水難事故の資料は水難防止が前面に出ているが、水遊びができる場所であるという財産価値を意識されることが必要ではないか。

◆維持管理

- ・樹木伐採というと自然破壊をしているように聞こえるが、自然再生という意味合いも持っている。モニタリング結果を同時に出すことによって、管理的な伐採ではなく自然再生も含んでいるんだということを示せるのではないか。堆積土砂除去についても、河床低下にならないくらいの土砂をとっているんだというのを見せることで、環境を維持しながら管理しているんだというのを表すことができる。
- ・樹木伐採について一般の方に分かりやすいよう自然を守りながら川を管理しているところを分かりやすく説明してほしい。
- ・レンジャー活動の中として、琵琶湖河川事務所が実施する安全点検に地域住民が参加したところ、行政職員と住民の視点が違うことがわかった。視点の違いを体験・体感しながら、管理についてのお互いの意見を聞くと建設的な議論をしやすくなる。また、【利用】の「環境学習」と関連させ、利用環境の確認の意味も含めて、管理を担い得る地域住民の方と現場を一緒に見ることをすすめる。